



歌舞伎文字勘亭流の話

会員 若林 擴

勘亭流は、鎌倉期を代表する能書家伏見天皇の皇子、尊円法親王が創始した、和様書道の一流派「青連院流」に始まり、後に徳川幕府が公文書の書体を「青連院流」に統一し、これを徳川の「御家流」と称したもので、この官許の書体「御家流」から生れた装飾文字が勘亭流であります。

徳川時代の安永八年（1779年）の正月、江戸中村座、座主九代目中村勘三郎が、「御家流」の書家、岡崎屋勘六に中村座の表看板・番附等の揮毫を依頼し、勘亭こと岡崎屋勘六は「御家流」の書体に工夫を加え、歌舞伎の芝居文字として「勘亭流」を完成したものであります。

勘亭流の文字は初めから歌舞伎興行の成功を願い、

1. 文字の線を太くすることにより隙間を少なくし、客席に空席の少ない事を祈り、
2. 文字に丸みを持たせて線を尖らせず、興行の無事円満を祈り、
3. ハネル所は内側にハネ、お客を劇場にハネ入れる、と縁起を担いで書き上げたところ、

これが大好評を博し、以来江戸中の劇場がこの書体を用い、大阪にも広まり、日本全国に歌舞伎文字として定着したもので、勘亭流は歌舞伎から生まれ、歌舞伎だけに使われる、由緒ある独特の書体となりました。

歌舞伎では鳥居派の芝居絵が独自の発展を遂げていますが、鳥居派の絵師三禮堂清忠が勘亭流の伝承者でもあったように、絵看板に書かれる文字は、勘亭流を除いてどんな文字も考えられないほどであり、いかにも歌舞伎の雰囲気と合った素晴らしい書体であったといえます。

ちなみに、歌舞伎座の劇場正面に高く掲げられた「招き」という出演の役者の名前を勘亭流で書いた板（関東では屋根つき、関西では屋根無しで、「屋根」は「人」の形では無く、劇場の大入りを願い「入」の形）が下

から仰ぎ見ても同じ大きさに見えるように、文字の頭を大きく下に向かって小さく書くように工夫されています。

千社札等の江戸文字、相撲番付に使われる相撲文字、寄席文字は楷書を基本とし、庶民でも読める文字と成っていますが、勘亭流はこれとは異なり、行書を様式化した芸術性の高い文字であり、江戸時代の武士、裕福な町人等の知識階級は、「御家流」を当然習っていたので十分に判読出来たかも知れないが、現代では想像もつかないほどに図案化された文字であります。

現代の勘亭流は「御家流」の素養なしでも読めるように徐々に変わってきたものと思われまます。

勘亭流の流祖、勘亭こと岡崎屋勘六の墓は、台東区西浅草1-7-19の清光寺にあります。

ちなみにカリグラフィーとは十七世紀頃から使われた言葉で、ギリシャ語の「calli 美しい」と「graphein 描く、書く、記録する」の合成語で、「美しい書き文字」を指します。その意味は単なる書き文字とは区別され、言葉を伝える機能だけではなく、より美的効果を意図した装飾文字のことであるといえます。

コラムのデザインは、勘亭流で書かれた歌舞伎文字の色々と私のサインです。

